

新刊図書の紹介

『木曾三川の伝統漁』 ～人と魚の知恵くらべ～

近年、河川に対しさまざまな要望が寄せられるなか、魚にやさしい川づくりをめざす者にとっては、魚の生態を学び、広く知識を得ることが不可欠な条件の一つとなってきました。このため、川漁師の知恵と努力の結晶である伝統漁法から魚の生態を解きあかし、魚が棲みやすい川としての条件を引き出せばとの思いから、本書『木曾三川の伝統漁』が当センターの編集で刊行されました。

漁法とは、この世に人間が誕生して以来、どうしたら魚をうまく捕獲できるだろうかと考え、経験を積み重ねて、つねに改変し生まれてきたものであり、魚の生態を解明していく上では、大きな指針を与えてくれるものです。と著者は説きます。著者は、動物生態学者で主に淡水魚の生理・生態や魚道を中心に研究されている中部女子短期大学副学長（岐阜大学名誉教授）の和田吉弘先生です。

木曾三川では、伝統的な漁法や漁具についてまとめられたものがなく、また、時代の変遷とともに減少していく伝統漁をこれ以上衰退しないうちにまとめておく必要性を強く感じ、本書で、現時点でわかるものについて、最大限網羅してまとめてあります。



著者 和田吉弘
編集 財団法人リバーフロント整備センター
発行 株式会社山海堂
定価 1,800円（税込み）

『川の親水プランとデザイン』 —これからの親水計画ガイドライン—

「親水」という字句は、昭和45年にはじめて使われたといわれています。当時の親水施設整備は、水に親しむという親水性の狭い意味である「水に触れる」、「水に接する」ことに力点が置かれていました。

その後、昭和60年前後になると街や居住環境のアメニティのニーズの高まりから見た目の美しさ、景観性が強調されるようになり、河川の親水護岸、景観護岸といわれるものが多くなってきました。しかし、これらの多くは、「川らしさ」、「地域らしさ」が生かされていない、また生態系ともっとうまく共存させるべきといったことが指摘されはじめました。

本書は地域特性を生かし、水辺事故に対する安全性などを考えた魅力ある親水空間を創造・再生していくためのガイドラインとしての役割を意図したものです。



編著 財団法人リバーフロント整備センター
発行 株式会社山海堂
定価 4,800円（税込み）